ホーソーン文学におけるマーガレット・フラー伝説

上　野　和　子

Margaret Fuller Legend in Nathaniel Hawthorne's Narratives

Kazuko Ueno

Abstract

Margaret Fuller, living in the nineteenth century's 'Cult of True-Womanhood', spent all her life exploring the territory beyond her destiny. When she met newly-wed Hawthorne at Concord, she worked as an editor of 'Dial' and pondered on the relationship between man and woman.

In his works such as 'Rappacini's Daughter' and *The Scarlet Letter*, Hawthorne dramatized Fuller as a 'Dark Lady' who told a story of punishment and retribution. Like Beatrice, her father's good intention to give his daughter higher education made Fuller isolated from the world; Hester, being a noble and courageous woman, cherished in vain for the idea of being a prophetess for a new world. Hawthorne fully sympathized her idea, yet kept his attitude conservative, considering that Fuller with her knowledge and claim was a stigma in those days.

In conclusion I would like to say that Fuller's radical (at that time) ideas about women's rights, equality of both sexes and the nature of marriage influenced Hawthorne's writings, especially those works such as 'Rappacini's Daughter' and *The Scarlet Letter*.

はじめに

ホーソーンがその構築に加わったとされるマーガレット・フラー伝説は、20世紀後半フェミニズム運動の興隆とともに解体された。そして、フラーが再評価さ

れ始めるとホーソーン文学もフェミニズム批評の洗礼を受けてきた。*Italian Notebooks* (1884) の出版で、ホーソーンはフラーを嫌っているという風評が成立したように見えたが、実際はホーソーンこそフラーから大きな影響を受け、作品にフラーをモデルとして書き込み、フラー伝説を醸成するような性やジェンダーをとりこむ社会装置に深い洞察力を示した作家であった。 フラー伝説とは、いわゆるジェンダー化された文化のなかで、境界侵犯の罰と報いというテーマを物語り、家父長制的な権威ある書き物（スクリプチュア）から女性を口承文化的社会の中に沈潜させる作用を生成したものである。ホーソーンは、公認され得る言葉の意味からは、決してフェミニストではなかった。　しかし、女性を従属的な性と定義づける抑圧的な社会において、誠実さと誇りを持ってもって生きようとする強烈な個性の女性の問題にひきつけられていた(Springer 69)。　ホーソーンの描くそのような女性のモデルはさまざまに研究されているが、中でも一際光を放つ女性がマーガレット・フラーであった。

フラーは１９世紀前半のアメリカで、「女性らしさ」の領域がむしろ収縮していく時代に、絶えずその境界を越え、「女性らしさ」の領域を拡大しつづけた女性であった。初めボストンで『ダイアル』誌の編集をし、女性を集めて『対話』を開き、ニューヨーク・ディリィ・トリビューン紙で文芸・社会批評を担当、1846年にはアメリカの女性で初めて、ヨーロッパの特派員となった。フラーの関心は、未だ地方文学と見なされていたアメリカ文学の展望１を紹介することであり、インディアンや移民、アイルランド人、黒人、売春婦などの問題を喚起し、挫折したイタリア革命の歴史を残す方向へ向かった。

しかし、当初フラーの重大関心事は社会における女性の地位であった。初めてホーソーンがフラーに会った1839年秋、フラーは後に主著となる『19世紀の女性』を書くために、女性の教育・職業、対等な男女の結婚について考察していた。ホーソーンの妻ソフィアは、フラーの『対話』のメンバーであった。ホーソーンとの結婚を知らせてきたソフィアに、フラーは夫妻の結婚を理想的なものになるだろう（1842年6月）と手紙に書いている。フラーにとって女性問題は自らの問題であった。25歳で国会議員であった父親を失い、5人兄弟姉妹の長女であるフラーは、一家の大黒柱として働かなければならなかったからである。

実際、ホーソーンとフラーが交流したのは、1839年秋から1846年のわずか5年の短い間であった。しかし、フラーが1850年に亡くなるまで、フラーとホーソーン夫妻は公私共に大変緊密な絆で結ばれていた。ホーソーンはフラーに対して常に尊敬の念を持って接し、フラーの活躍はホーソーンの女性像に革新的な本質を与えたと言ってよいであろう。特にホーソーンの作家人生全体を視野に入れ、その

長かった修業時代、短い傑作の創作時代、そして痛々しいほど早い凋落の訪れを考慮する時、 その頂点に達する5年間のホーソーンの人生に、フラーの姿が強烈に刻み込まれていったと考えざるをえない。とにかくホーソーンの4大長編小説のうちで、爆発するように才能の花開いた『緋文字』(1850)の出版から、フラーをモデルにした『ブライズデイル・ロマンス』(1852)までの３つの小説の出版はわずか3年間しかたっていないのである。最後の長編『大理石の牧神像』は10年後リヴァプールの総領事を退官した後1860年に完成されたが、寓話的なプロットや性格描写に以前の作品の強靭さはみられない。

ホーソーンの描いた多くの女性が、さまざまな境界を越え、罰と報いのテーマに彩られているのをみる時、フラーへの関心が想起される。ホーソーンは、フラーの素晴らしい教養やその社会進出に惹かれる反面、当時のアメリカ社会では、その学識や主張が女性の幸せを阻む不名誉な条件、stigmaとなってフラーを苦しめていることにひどく心を痛めたようである。ホーソーンは、父親から科せられた境遇のために被ったフラーの孤独を、「ラパチーニの娘」において寓話化し、イタリア社会の荒波にもまれる孤立無援のフラーの姿を、『緋文字』のヘスターの肖像に投影することになった。さらに、ホーソーンは女性の権利運動家を、フラーの死後『ブライズデイル・ロマンス』の主人公として再生させた。

フラーが挑戦し続けた19世紀前半の父権制社会は、ラパチーニの娘やヘスター・プリンの世界の延長上にある。境界を侵した女性たちは罰を受けるが、シンボルとなった「緋文字」や「毒」は、罰そのものであった。従来のフェミニズム批評は、作家ホーソーンを父権制社会の保守主義者と見なし、二項対立的なジェンダーの概念で一刀両断に切り捨ててきた。プロットの観点からは、越境する女性、Dark Ladyはみな罰を受けて破滅していく。ホーソーンはヴィクトリア朝の家庭の天使、Fair Maiden に好感を持っていると断定されがちである（Erlich 101）。特に病気持ちで家にこもっていたソフィアとの結婚が、ホーソーンの女性観を紛らわしいものにした。しかし、ホーソーンはDark Ladyに罰を与えながらも、その進歩的な方向を支持しているというのが筆者の主張である。ホーソーンの両義的なプロットと語りのなかに、フラーの存在を明らかにしDark Ladyの罰と報いを検討するのが本稿の趣旨である。したがってまずフラー伝説の生成を分析し、ホーソーンの作品『ラパチーニの娘』と『緋文字』の女性像および女性問題が如何に語られているかを検証する。それ故に歴史的、伝記的な資料を活用し社会学的および心理分析的な解釈でフラーとホーソーンの関係を探り、物語の「声」「沈黙」という表象に注目する。

1. フラー伝説の生成

フラー伝説はフラーの死後30年経た後、徐々に形成されていった。結果的ではあるが、それは醜聞をかぶせて業績を無効にする政治上の常套手段として利用されたのであった。フラーは1850年6月、イタリアの貴族である夫オッソリと子供を伴って帰国途中、ニューヨーク沖で家族もろとも溺死した。 この時彼女は、アメリカで最も有名な女性となった。フラーは1846年からイギリス、フランス、イタリアを訪問し、カーライル、ワーズワース、ジョルジュ・サンド、ショパン、アダム・ミッキーヴィッツ、ジュゼッペ・マッチーニなどに会見し、ジャーナリストとしての地位を確立していた。 1849年には、ローマ共和国の樹立と崩壊を報じ、イタリアの統一と独立に対する援助を訴えた。その後エリザベス・ケイディ・スタントンによれば、主著『19世紀の女性』によって、フラーほどアメリカの女性参政権運動家たちに大きな影響を与えた者はいなかった（Flexner 68）。フラーは1850年、ウースターで開催された第一回全米女性の権利会議に出席することになっていた。フラーの死は全米各紙に掲載され、その名声は30年ほどアメリカ文化や文学史に顕著な地位を占めていた。実際、エマソン等の編集した『回想録』や著書『19世紀の女性』、『文学・芸術論』などの売れ行きは良く、1884年には、ジュリア・ワード・ハウとトーマス・W・ヒギンソンがともにフラーの伝記を出版しているほどであった。

しかしながら1884年、ホーソーンの息子ジュリアンが *Italian Notebooks* を出版した時、フラー関係者の間でスキャンダルとなった。 フラーの死後8年、ホーソーンがイタリア在住のアメリカ人彫刻家ジョセフ・モージャア(Joseph Mosier)からフラーのゴシップを聞かされ、フラーを激しく謗った文が公になったのである（Mellow 494－95）。 ホーソーンは「不思議なのは彼の感情である。フラーには女性的な魅力がないからである。しかし彼女はあらゆることに挑戦し、あらゆる方面の経験を求め、 強く粗野な人間であった。彼女はこの上ない苦痛を忍び、自分を磨くために全力を尽くしたが、もちろんその変化は皮相的なものであった。…フラーは大ペテン師なのだ。」と書いた（ 14:155-156)。

この事件は、故人となった作家の動機や出版に関する所有権という深刻な問題を引き起こした。しかし、文学評価と国家の正典を構築する裏側に、しばしば無意識な政治的駆け引きがあることを劇的に暴露したという点で教訓的であり、また魅力的でもある（Mitchell 13)。この頃までにホーソーンの作品は、ティックノー・アンド・フィールズ社から、次にはオズグッド、ミフリン社によって、アメリカの古典文学全集のなかに権威ある作家として収録されていた。ジュリアン・

ホーソーンはフラーを貶めることによって、父親のホーソーンに伝統的な家庭を擁護する威信を付け加えた。従来の「陰鬱で、隠遁生活を好む作家のイメージは、家庭的で頼りがいのある男性」(Mitchell 18)に生まれ変わった。文化的に無傷な「聖人」を求める国民的な文学者の正典化の作用によって、フラーの地位は下方修正された。以後、20世紀の60年代の終わり、70年代に入るまでフラーの著作は絶版になり、キャノンから消えた。

ノーマン・ボドゥレッツによると、ある地域のある世代に一人、必ず知的な女性のスーパー・スター、つまりDark Ladyが生まれる。20世紀半ばのアメリカでは、初めメアリー・マッカーシーが、次にスーザン・ソンタークが そうであった。このDark Ladyは名声を得ることにより罰を受けるのである。それがフラーに最初に起こったのであった（Dickenson vii-viii)。 しかしながら、フラー攻撃をジュリアン・ホーソーンから始めるのは片手落ちである。 フラーは神童を謳われた若い頃から、手厳しい文芸書評のために多くの敵がいたのである。

フラー伝説の生成は二段構えであった。第一にフラーの容貌に対する中傷、第二には、過激な政治思想の持ち主として無視や敵視が始まった。当初フラー伝説を口にしたのはヘンリー･ジェイムズであった（James 62）が、エマソンはじめ、男性の評論に必ずフラーの容貌に関する揶揄（Donna Dickenson　x）が続いた。エマソンはフラーのextreme plainnessを強調した（*Memoirs* vol.1-202 ）し、オリヴァー・ウェンデル・ホームズは彼女のヘビのように長い首(Miller, xvii)を思い出し、20世紀半ばになってさえペリー・ミラーはフラーをmonumentally homely (Miller, xvii)と記した。フラーの容貌と功績は併記され続けたが、その一方女性運動や社会改良運動などとともに文芸批評は蔑ろにされていった。原因の一つは家父長制社会の無意識にhomosocialな（ Sedgewicck １）社会の常として、女性に対する性的嫌悪、抑圧の感情の発露と考えてよいだろう。ジェイムズは女性の解放運動やヨーロッパの革命に理解がなく、フラーは美しい文章を書き弁舌さわやかで女優のような立場にあったと記している（James 62)。フラーの本質的な言説は評価されず、話すという姿が注目され、それは言説の周辺に響く「声」となって韜晦された。フラーは超絶主義者の脇役の「声」となったのである。

2. スリーピィ・ホロウの森であった娘

けれどもホーソーンとフラーの交わりは、ニューイングランドの秋のように明るく始まり深まっていった。　フラーは初めからホーソーンの才能に注目し､積極的に『ダイアル』誌で取り上げた。児童書『おじいさんの椅子』については、

その‘delicate satire’を誉めて本格的な大人の作品を書くように勧めた。しかし1842年7月、短編集『トワイス・トールド・テイルズ』の評は厳しかった。フラーは、作品の登場人物は男も女も、「居間の壁に映った夕闇の炉辺の火影」と同じで、作品を「血のかよった暖かい色」(blood-warm colors)で染め上げるには、「仕事に奮起し人生にたちむかわなければ」、「深い経験の欠如からくるこの冷たく希薄なプロット」を克服できないだろう」と結んだ。

1839年秋、フラーに初めて会ったホーソーンは、『トワイス・トールド・テイルズ』がようやく認められたところであった。一方、6歳下のフラーは、超絶主義クラブのメンバーで、翌年にはエッカーマンの『ゲーテとの対話』等の翻訳を出版している。エマソンはちょうどダンテを翻訳していて、フラーをベアトリスに擬え、「古今を問わず、世界的な範疇にはいる最も偉大な女性であると絶賛した」（8:371）とホーソーンは記している。

コンコードに住むエマソン家の滞在客となったフラーは、しばしば結婚したてのホーソーン夫妻を訪問した。初めてフラーがオールド・マンスを訪問した数日後の8月21日、ホーソーンはスリーピィ・ホロウの森でフラーに出会ったことを日記に綴っている。このエピソードは、『ラパチーニの娘』のプロットを考慮に入れる上で示唆的である（Mitchell 74)。それによると、独りで寝そべって読書をしていたフラーの傍らに座って、ホーソーンは「秋について、森で迷う喜び、マーガレットの聞いたカラスの声、……小さい頃の経験やその思い出が消えた後残っている影響や、……あれこれ高尚なものから卑近な哲学について語り合った。」（8:342-343）(Mellow 211-213)と記した。一方、フラーは日記に「何としあわせな、しあわせな日でしょう。極めて清澄な光。それについては書けないくらい……」(Journal 325)と短く書いた。つらい子供時代を過ごしたホーソーンは、フラーの幼い頃の、父親から受けた抑圧的な厳しい知的訓練、そしてその特異性のために強いられた孤立に同情を禁じえなかったであろう。

とにかく、スリーピィ・ホロウの午後を過ごした数日後、彼は「ラパチーニの娘」を書き始めた。この作品は、ホーソーンがフラーをオールド･マンスというエデンの園のヒロインに仕立て上げたものと考えてよいだろう。「ラパチーニの娘」を3人の男性の「愛情と恐怖」の犠牲となった娘と捉えると（Brenzo)、ジェンダー社会の装置が明らかになる。 ブレンゾは、この極めて魅力的な寓話を、他の物語『緋文字』『痣』『イーサン・ブランド』同様、人が人の心を占有するというテーマを扱い、3人の男性がベアトリスの女性性を利用したと主張している。研究のために自分に依存して命令通りに動くように娘を栽培したラパチーニ博士、教授のポストをベアトリスに奪われるのではないかと不安を抱いているバリ

ョーニ、自分を支配し破滅に追い込む力を恐れながらも、ベアトリスの性を欲望するジョヴァンニ、これら3人の男はみなベアトリスを非情なまでに恐れ、そのためベアトリスは彼らの犠牲者となったのである。

しかし、これは従来のフェミニスト的な、あるいは自然主義的な男性優位社会の観点から見た、美しいが哀れなベアトリス像である。一方、ベアトリスを主体として越境する女性として考えてみよう。彼女は、特異な環境で育ったが、孤独に耐えて父親から並外れた学識と植物の栽培技術を身につけ、豊かで優しい心情と性的魅力を得た。そして、いつのまにか社会的に、バリョーニの、ジョヴァンニの、そして父親のラパチーニの競争相手となったのである。男たちは、ライヴァルには勝たねばならない。近代社会の少数派であるベアトリスはここで敗北する。彼女は単に女性であったからではなく、フラー同様有能であり彼らの社会に進出したので破滅させられた。ベアトリスは自らの徳によって罰を受けた。その象徴が「毒」であった。従って、ブレンゾの認めるように、これらの男性の誰一人として男性に対しては同じように強烈な恐怖感を抱くようには描かれていない。ラパチーニ博士にライヴァル意識を燃やすバリョーニでさえ、まるでゲームのような調子でそのことを語り、ベアトリスに対してだけ恐怖に慄く。

ベアトリスが徐々に、その学識を無視され、無垢の天性を疑われ、その美貌さえも奇怪なもののように解体されていく過程は、極めて巧妙なホーソーンの認識論的なジェンダーの構築技法があった。ベアトリスとジョヴァンニの葛藤は極めて簡潔に述べられている。ジョヴァンニがベアトリスに尋ねる。「世間のつまらぬ噂に反して、僕は自分の見てきた君を信じてよいのか？」(10:111-112) しかし、自分の目を信じられない彼は、すぐに幾分性的な含みを持たせて、「君の唇からきたもの以外は信じさせないようにさせてくれ」と言って、ベアトリスの本心を推しはかる。彼女はすぐに、「私のことで今まで空想したものはみな忘れてください。……外側が真実であれば、中身は偽りかもしれません。でも、ベアトリス・ラパチーニの唇からでた言葉は心の底からでた真実です。」(10:112)もちろん、ジョヴァンニは信じなかった。ラパチーニ同様、彼は単に「見る」ことではなく、自然を象徴として読むという理想主義者の「ヴィジョン」に執着していた。それは現実の姿ではなく幻影であったのだが。エマソンの超絶主義にのっとり、ジョヴァンニは初め「ラパチーニの庭は自然と交わりを保つために象徴的な言葉になる」(10:98)と考える。皮肉にも彼はベアトリスの性格を読み間違うのだが、さらに強いのはそれを象徴として読み取ろうとする欲望である。なぜならば、物体を象徴として読み取ろうとする欲望は、相手に力を行使する意図があるからである。自分も毒に染まったという恐怖の中で、ジョヴァンニは自分の見たベアトリスを

信じられず、彼女の言葉さえ理解できなくなる。ベアトリスの肉体は解体され、言葉も意味を失う。つまりジョヴァンニにとって、ベアトリスは精神や心を通い合わせる他者ではなく、主体に働きかけられる客体という存在に貶められる。このようにベアトリスは、客体化され、周辺に追いやられて姿の見えないエコーにされてしまう。 残ったのは毒である。ベアトリスは、ジョヴァンニに「初めから毒を心にもっていたのは、私よりあなたではありませんか？」といってこときれる。果たしてこの言葉は、ベアトリスの反逆の意味を構築できるであろうか？

3.『緋文字』――人生に立ち向かって

ベアトリスは父親から毒を吹き込まれたが、マーガレット・フラーが父親から譲り受けたものは教養とともに、困難を恐れず辺境へと進む勇敢なアメリカ精神だった。フラーは大変な社交家ではあったが、彼女の才能と人々の偏見が人をしり込みさせたらしい（Memoirs202）。おそらくホーソーンが見たものは、フラーの利点が罰として働いていることであった。アメリカでフラーは、女性からは慕われ男性からも評価されたが、そのことがフラーをますます孤独に追いやった。フラーはイギリスに旅行中、交際を続けてきたドイツ人の企業家ジェイムズ・ネイサン（James Nathan）が本国で結婚したと知らされる。また、イタリアで出会って結婚することになったオッソリの立場は窮状の極みであった。教皇庁に近い貴族の家系で裕福ではないが、もし彼の支持している革命が成功すれば、財産は没収となるであろうし、それ以上に家長的存在の長兄は彼がプロテスタントの年上の外国女性と結婚することに難色を示すことは明らかであった。けれども革命は失敗し、どうやらフラーの息子は洗礼名をもらったようである。このようなフラーの個人的に困難な状況が、特派員報告の激しい愛国的な記事となったのかもしれない。少なくとも当時イタリア革命に関与し戦う一方、ひそかに男児を出産したと噂されるフラーのイメージが激しく作家ホーソーンの心を揺り動かしたことは間違いないと推察される（Von Mehren 348　Dickenson xii-xiii, Reynolds 79)。

『緋文字』を書き始める頃のホーソーンが、フラーと同じように壮絶な生存の戦いを強いられていたことは、やはり注目すべきである。1848年の春から夏にかけて、ホーソーンはセイラムの税関の職を失った。暮しに困っているのを見かねて友人たちの集めた金をフィールズから受け取り、ホーソーンが涙をにじませたという手紙を書くのもこの頃である（Mellow 310）。ホーソーン一家は、フラーの親友キャロライン・スタージス・タッパンの世話で、生まれ故郷のセイラムからマサチューセッツ州レノックスに引っ越した。

その頃、フラーはローマ共和国政府の革命軍に看護婦として参加していた。6月7月の間、ルイ・ナポレオンはローマを脱出した教皇を擁護し、オーストリアに対抗するためフランスの軍をローマに派遣した。フラーはマッツィーニの共和政府を歓迎し、革命政府の戦いは「イタリア全土に共和制をもたらす決意」を示したものであり、この信念を「私たちアメリカの、ヨーロッパ全土の運命にしなければならない」（July 24, 1849）と特派員報告で訴えた。

夏の終わりまでには、ホーソーンもフラーも公的・私的な失墜から、不確かな未来と対面せざるを得なかった。6月半ばフラーは軍の命令でローマを離れ、山岳地の町ライチへ息子を引き取りに行った。乳母に預けられていた息子は栄養不良で死にかけていた。10月までにフラーは夫と息子と共にフィレンツェに落ち着いた。レイノルズによれば、9月の初めにソフィアは、キャロライン・スタージス・タッパンからフラーが結婚し男児を出産したと聞かされた。フラーはその年の春に、家族よりも先に友人のタッパンに打ち明けていた。その2週間後にホーソーンは『緋文字』を書き始めた（Reynolds 187 n.2)。

テーマとの関係で言えば、かつてフラーは、『おじいさんの椅子』の中のどれよりも1838年の*Token* に掲載された‘Endicott and The Red Cross’が優れていると誉めたことがある。この小品には、赤い布地に金糸の文字を胸に縫い付けた姦通罪の女性が登場する。また、ホーソーンは『緋文字』執筆の開始一ヶ月前、エンディコットのクエーカー教徒アン･コールマンの迫害について書いた。これはS.H.パーキンスの「代議政体の悪弊」と、H.D.ソローの「民事政府への反抗」(後の「市民の反抗」)とともに、エリザベス･ピーボディ主幹の*aesthetic papers*に「メイン･ストリート」の題名で巻頭を飾った。フラーの革命運動の関与について、ホーソーンはソローの市民の反抗という定義とどのように結びつけたのだろうか？

おそらくホーソーンの描いた女性のなかで最も劇的に登場したのが、ヘスター・プリンである。ヘスターが牢屋の入り口から出てくる初めの場面で、ヘスターの自由で独立心のある高潔な性格が示される。看守は、「左の手に警棒をさしのべ、右手を若い女の肩において、前へ押し出した。すると、女は牢屋の入り口に立って、生まれながらの威厳と、強い性格を表わす仕種で、看守の手を払い除け、自分の自由な意志によるかのように、外へでた。」（2章）ヘスターは人々の前に出ると、「胸につけている恥の印のために燃えるように真っ赤になったが、しかも高慢な微笑を顔に浮かべ、眼は恥じる色もなく、町の人々と、近所の人々を見渡した。」その後、ヘスターの態度は牧師に対してもまた元の夫に対しても、頑ななほど赤子の父親の名前を言わず沈黙を護り、態度は従順で穏やかであるが、むしろ権威に対して反逆的ですらあった。

ヘスターの「生まれながらの威厳と強い性格」はフラーの主張に明らかであった。フラーはかつて「女性は船長にだって」なれる(w19 115)と書いて保守派の顰蹙をかった。しかしローマで教皇ピウスIX世の政治力が弱まり首相ロッシが暗殺された時、多くの外国人はこの地を去った。フラーはアメリカ駐伊大使の優柔不断な態度にしびれを切らし、特派員報告にこう書いた。「ここに有能な大使を送ってほしい。外国生活の経験があり立派な判断力を備えて行動することができ、欲を言えば、アメリカの党内政治を超えた知識と先見性のある人物を。……あと一世紀経てば、私は自分で大使にしてほしいと頼むかもしれません。（もちろん、その時には多くの大使と同じように、私も事務官を雇って大半の仕事をさせるでしょう）しかしまだ女性の時代は来ていないのです。」（Dec.2,1848）

『緋文字』の主人公ヘスターは欲求、才能、情熱において際立って優れた特別な女性である点で、フラーと共通している。彼女は行動のみならず、存在そのものが社会的領域の境界を越えている。かつてフラーは、ジョルジュ・サンドやメアリー・ウルストンクラフトについて、「天賦の才に恵まれ、思慮深く高潔な徳と洗練された静謐を保つことができ、したがって生まれながら狭いところに留まることができないので、束縛を解き法を破ってしまう。」（W19　48）と述べたが、ヘスターも同じ運命を荷っていた。ヘスターが興味深い人物となっているのは、罰を受けてから独立独歩の進展ぶりである。ヘスターは、社会的な孤立無援、孤独感、自立の難しさ、母性の葛藤に耐え、すばらしい勇気でそれを乗り越えていった。ヘスターの真摯な態度が感動を呼ぶ例は、牢獄の中で医師として現れた夫プリン（その後チリングワースを名乗るのだが）との会話「あなたには悪いことをしました。」という場面、そして7年後牧師のやつれた様子に衝撃を受けたヘスターが、夫の素性を隠しておくという昔の約束を反古にして欲しいとチリングワースに頼む場面である。「あの人があんなにおぞましい空虚な人生をこれ以上続けていくのは何の意味もありません。･･･あの人にも、わたしにも、あなたにも、そしてパールにとってもよいことはありません。」（14章）絶望的ではあるがヘスターが自分の考えを行動に移し、自分の運命を切り開いていくという場面には悲劇的な美しさがある。それゆえ、ヘスターは必然的に19世紀に奨励された受動的な、臆病で、依存型の女性とは正反対で、現代からみれば独立心が強く創造性があり誠実な態度はすばらしいのであるが、当時の閉塞的な社会からははみ出してしまう。

フラーは、男女の性的二重基準を許容する19世紀の社会を痛烈に批判し、男性も結婚における純潔(purity)や献身(consecration)が可能であると公言した(w19 90)。興味深いことに、ヘスターは同じようにリベラルで進歩的な考えを貫いて

いた。ヘスターは誇り高く牧師に言った。「わたしたちのしたことはそれなりに神聖なところがありました。私たちはそう感じました！そう語り合いました。 あなたはお忘れになったのですか？」それに対して、臆病な牧師は「お黙りなさい。いや、忘れていない」と受け身である（17章）。1842年7月のフラーに宛てた手紙で、ホーソーンは「ソフィアと一緒にミルトンの『失楽園』や他の有名なものを読んでいる」と書いている。「特にわれわれは、ある事例ではどうして、黄金時代の答申を無効にし、法廷で詩人や小説家に裁判を受けさせ、有罪にしているかを考える時驚くほかはありません」と意味深く記している。ミルトンの離婚や結婚の冊子を念頭に、当時未だ離婚が容易に許されなかったことを憂慮していると考えたい。ヘスターは再会した夫に対し、「ご存知のとおり、私はあなたに正直でした。私は愛を感じていませんでしたし、そんなふりをしたこともありませんでした。」（4章）と述べている。ヘスターは、ミルトン同様、結婚は神の御前における男女の聖なる愛の絆によるものであり、自我の孤立を妨げたり治癒するために精神の結合として神によって制定されたものなのであるから、一旦この絆が存在しなくなったら結婚も終わると考えていたようだ。

4. もっと明るい時代がくれば

しかし、フラーを、あるいはヘスターをホーソーンが肯定的にみるか否定的に見るかは、ホーソーンのカルヴィニズムをどう評価するかに深い関係があると思われる。レイノルズやバーコヴィッチは、ホーソーンがフラーを政治的に危険な人物と感じたと理解している。レイノルズはホーソーンの心のなかには、フラーが「革命と誘惑という概念」で結びついていて、フラーは、「世界で最も権威ある政治的宗教的な指導者、教皇庁の転覆を図る女性革命家」であり、「自分の正当な考えや感情を覆しかねない自由思想の誘惑者」として恐れたのだと解釈した。バーコヴィッチ（Bercovitch）は最近、さらに女性の権利や奴隷制廃止運動による国内の大改革の結果を懸念したのだと述べている。バーコヴィッチもレイノルズも、フラーは社会的にも性的にもホーソーンを脅かす存在であると解釈した。しかしながら、ホーソーンの結婚観や、少なくともヘスターに言わせている言葉から判断すると、ホーソーンはフラーに対して不安や罪意識というよりは、彼女の意見に共感していたことが理解される。

ただフラーの主張の社会的妥当性についてホーソーンは当面懐疑的な印象を持っていたといわざるを得ない。『緋文字』の最終章を書き終えた1850年2月、ホーソーンはフラーが「運命の予言者」になることを確信して帰国を待っていた。

『緋文字』の最終章では、フラーがかって、『19世紀の女性』のなかで述べたように倫理性が強調される。「メアリー・ウルストンクラフトやジョルジュ・サンドのように社会を改革しようとする者は、奔放な熱砂の衝動の中で叫んでいるのではないということを示さねばならない。改革者の生活は、……みずから厳しい法の遵法者でなければならない。」とフラーは述べた。（W19 48）

最終章で、ヘスターは一度去ったニューイングランドにまた戻ってきて、胸にあの表象をつけ、人々の相談に乗った。ヘスターの考えは、将来の女性について思いを巡らす。それは、数年前のフラーと同じである。「神の御心がこの世でもおこなわれる天国の時代をむかえる準備がととのい、もっと明るい時代がくれば、あたらしい真理があらわれて、男女のすべての関係がお互いの幸福という、もっと確かな土台の上に築かれることになるだろうというのであった。若い頃、ヘスターは自分のことを予言者として宿命づけられた女ではないかとむなしく想像したこともあったが、しかし、もうずっと以前から、神聖で神秘的な真理と伝える使命が、罪に汚れ、恥にうなだれ、一生悲しみを背負った女に託されるはずがないことを認めた。」

ここのホーソーンの意見は、嘗てフラーがヨーロッパに立つ前の意見と同じである。その後、フラーはパリでジョルジュ・サンドに会い、彼女が制度上離婚できないこと、浮ついた噂は真実ではないことを知り、また、サンドの偉大さを認識したが、もし『緋文字』のこの部分を読んだら、どのような意見を述べるか興味深いものである。

フラーと異なり、ホーソーンが境界を侵した女性に下す審判は厳しい。森の場面でヘスターはこの地を一緒に去るという計画にディムズデイルの承諾をとりつけた。しかし、「ヘスターは、森と同じくらい暗黒の精神の荒野で、規則もなく、案内もなく、流浪していたのである。……緋文字は、他の女なら、足をいれなかったであろう場所へはいる、旅券であった。恥辱と、絶望と、孤独！……この三つのものは、手荒な教師であって、彼女を強くしてくれたが、間違った道をも示した。」ヘスターは、父権制階級社会の頂点に存在する意志を示したディムズデイルの死により、ふたたび周辺の女として社会の底辺に沈んだ。

ところが、最終の2章で一端離れたニューイングランドに戻ってきたヘスターは、この社会の隷属を自主的に受け入れたのだろうか？　これは、否である。何故ならヘスターは、自分を咎める徴しを胸につけ、その文化価値を撥ね付けるように勧めたばかりか、一時は一緒になった人のいる場所に大変な労苦を忍んで離れようとしなかった。ヘスターのニューイングランドへの帰還は、十分にヘスターの反逆と見なすことができる。ヘスターは自分の罪を認めていなかったが、自

分の生活が緋文字の社会的立場に条件づけられていることは認めた。そして社会が押し付けた自分のアイデンティテイに抵抗し、とうとう文字本来の意味ではなくて、自分自身を表わすように仕向けることに成功した。その意味で社会は少し変化した。ヘスターは強いられた境遇から忍耐強く脱出したのだと結論できる。

結び

フラーの事故死のニュースに対して、ホーソーンの直接の反応は残っていない。しかし、ソフィアが母親に充てた手紙によると、「キャロライン（スタージズ・タッパン）が、一言も言わず、ソフィアに新聞記事を手渡した」と伝えられる（Mitchell 164）。フラーが船上で腰掛けたまま波に呑まれた姿は、長らくホーソーンの頭から離れなかっただろう。その後、フラーはゼノビアとなって蘇るのであるが、最もよくホーソーンがフラーを描き得たのは、ヘスターによってであっただろう。ヘスターの多様性を描くことによって、ホーソーンは、フラーのDark Ladyとしての価値を評価したのであると考えるものである。

フラーは初め、Tokenで読んだホーソーンの短編をその繊細な書きぶりから、女性の作品だと思ったと伝えられている。 また、フラーの死後、フラーをモデルに書いた『ブライズデイル・ロマンス』のなかで、ホーソーンがフラーのことを「今世紀で最も偉大な女性の一人」と記していることからも分かるように、二人の信頼は大変厚かった。ただ、 フラーは政治や社会問題を扱う批評という分野で理想を描いて現実を越えていくのに対して、具体的なプロットの枠の中でシンボルを表象するホーソーンは、現実感覚を創作しなければならなかった。この点でも、フラーの批評は明るく、ホーソーンの物語は暗さを増すのであろう。

引用資料リスト

Fuller, Margaret, *Summer on the Lakes, in 1843* (University of Illinois Press 1991) 文中 SL と記す

Fuller, Margaret, *Woman in the nineteenth Century and Other Writings* (Oxford University Press,1994) intro. By Donna Dickenson　文中w19と記す

Fuller, Margaret , Larry Reynolds and Susan Belasco Smith ed. ‘*These Sad, But Glorious Days*’ : *Margaret Fuller’s Dispatch from Europe 1848-1850* (Yale University Press 1994)　文中は年月日のみ、記す

R. W. Emerson, W. H. Channing, James Freeman Clarke ed. *Memoirs of Margaret Fuller Ossoli* 2vols (1853, rpt.1880, 1972, Boston: Phillips, Sampson and co.)

R. N. Hudspeth ed. *Letters of Margaret Fuller* 6 vols. (Cornell University Press, 1983)

Miller, Perry ed. *Margaret Fuller: American Romantic* (Cornell University Press, 1963)

Myerson, Joel ed. *Margaret Fuller : A Descriptive Bibliography* (University of Pittsburgh Press, 1978)

Myerson, Joel ed. "Margaret Fuller's 1842 Journal : At Concord with the Emersons" *Harvard Library Bulletin* 21 (1973)

Flexner, Eleanor *A Century of Struggles* (Cambridge, Mass Belknap Press 1959)

Chalvat, William et al ed. *The centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus Ohio State University Press, 1974)　引用カッコ内（巻、頁）

James, Henry *Hawthorne* (1879, rpt. , 1956, 1863,1966, Cornell UP)

Mellow, James *Hawthorne in His Times* (Boston, Houghton Mifflin, 1980)

Brenzo, Richard "Beatrice Rappacini : A Victim of Male Love and Horror" *Nathaniel Hawthorne* Harold Bloom ed. (Chelsea House, 1986)

Mitchell, Thomas R. *Hawthorne's Margaret Fuller Mystery* (University of Massachusetts Press, Amherst 1998)

Bercovitch, Scavan "The Office of *The Scarlet Letter*" (Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1991)

Sedgewick, Eve Kosofsky, *Between Men* (Columbia University Press, 1985)

Reynolds, Larry J. *European Revolutions and the American Literary Renaissance* (Yale University Press, 1988)

ホーソーン作『緋文字』八木敏雄訳（岩波文庫 1992）訳文を参照した。